

花椰菜

宮沢賢治

青空文庫

うすい鼠ねずみがかつた光がそこらいちめんほのかにこめてゐた。

そこはカムチャツカの横の方の地図で見ると山脈の褐かつしよく色のケバが明るくつらなつてゐるあたりらしかつたが実際はそんな山も見えず却かへつてでこぼこの野原のやうに思はれた。

とにかく私は粗末な白木の小屋の入口に座つてゐた。

その小屋といふのも南の方は明けっぱなしで壁もなく窓もなくたゞ二尺ばかりの腰板がぎしぎし張つてあるばかりだった。

一人の髪のもぢやもぢやした女と私は何か談はなしてゐた。その女は日本から渡つた百姓のおかみさんらしかつた。たしかに肩に四角なきれをかけてゐた。

私は談しながら自分の役目なのでしきりに横目でそつと外を見た。

外はまっくろな腐植土の畑で向ふには暗い色の針葉樹がぞろりとならんでゐた。

小屋のうしろにもたしかにその黒い木がいっぱいにしげつてゐるらしかった。畑には灰いろの花椰菜はなやさいが光つて百本ばかりそれから蕃茄トマトの緑や黄金きんの葉がくしゃくしゃにからみ合つてゐた。馬ば鈴薯れいしょもあつた。馬鈴薯は大抵倒れたりガサガサに枯れたりしてゐた。ロシア人やだつたん人がふらふらと行つたり来たりしてゐた。全体祈つてゐるのだらうか畑を作つてゐるのだらうかと私は何べんも考へた。

実にふらふらと踊るやうに泳ぐやうに往来してゐた。そして横目でちらちら私を見たのだ。黒い繻子しゆすのみじかい三角マントを着てゐたものもあつた。むやみにせいが高くて頑丈ぐわんぢやうさうな曲つた脚きやはんに脚絆まをぐるぐる捲いてゐる人もあつた。

右手の方にきれいな藤ふぢいろの寛衣をつけた若い男が立つてだまつて私をさぐるやうに見てゐた。私と瞳ひとみが合ふや俄にはかに顔色をゆるがし眉まゆをきつとあげた。そして腰につけてゐた刀の模型のやうなものも今にも抜くやうなそぶりをして見せた。私はつまらないと思つた。それからチラツと愛を感じた。すべて敵に遭つて却かへつてそれをなつかしむ、これがおれのこの頃ごころの病気だと私はひとりつぶやいた。そして晒わらつた。考へて又晒つた。

その男はもう見えなかつた。

その時百姓のおかみさんが小屋の隅すみの幅二尺ばかりの白木の扉とを指さして

「どうか婆ばにも一寸ちよつと遭たつておくなさい。」と云つた。私はさつ

きからその扉は外へ出る為ためのだと思つてゐたのだ。もつとも時々頭の底ではあ騒動のときのかくれ場所だなどと考へてはゐた。けれども戸があいた。そして黒いゴリゴリのマントらしいものを着てまっ白に光つた髪の毛のひどく陰気なばあさんが黙つて出て来て黙つて座つた。そして不思議さうにしげしげ私の顔を見つめた。

私はふつと自分の服装を見た。たしかに茶いろのポケットの沢山ついた上着を着て長靴ながぐつをはいてゐる。そこで私は又私の役目

を思ひ出した。そして又横目でそつと作物の發育の工合ぐあひを眺めた。一エーカー五百キログラム、いやもつとある、などと考へた。人がうろうろしてゐた。せいの高い顔の滑らかに黄いろな男がゐた。あれは支那人しなにちがひないと思つた。

よく見るとたしかに髪を捲いてゐた。その男はおほまた大股おほまたに右手に入つた。それから小さな親切さうな青いきものの男がどうしたわけか片あしにリボンのやうにはんけちを結んでゐた。そして両あしをきちんと集めて少しかゞむやうにしてしばらくじつとしてゐた。私はたしかに祈りだと思つた。

私はもういつか小屋を出てゐた。全く小屋はいつかなくなつてゐた。うすあかりが青くけむり東のそらには日本の春の夕方のや

うに鼠色ねずみの重い雲が一杯に重なつてゐた。そこに紫苑しをんの花びらが羽虫のやうにむらがり飛びかすかに光つて渦を巻いた。

みんなはだれもパツと顔をほてらせてあつまり手を斜に東の空へのぼして

「ホツホツホツホツ。」と叫んで飛びあがつた。私は花椰菜はなやさいの中ですつぱだかになつてゐた。私のからだは貝殻よりも白く光つてゐた。私は感激してみんなのところへ走つて行つた。

そしてはねあがつて手をのぼしてみんなと一緒に

「ホツホツホツホツ」と叫んだ。

たしかに紫苑しをんのはなびらは生きてゐた。

みんなはだんだん東の方へうつつて行つた。

それから私は黒い針葉樹の列をくぐって外に出た。

白崎特務曹さうちやう長ちやうがそこに待ってゐた。そして二人はでこぼこ

の丘の斜面のやうなところをあるいてゐた。柳の花がきんきんと光って飛んだ。

「一体何をしらべて来いと云ふんだたらう。」私はふとたよりないこゝろもちになつてかう云つた。

「種子をまちがへたんでせう。それをしらべて来いと云ふんでせう。」

「いや収量がどれだけだったかといふのらしかつたぜ。」私は又云つた。

向ふにべつの畑が光って見えた。そこにも花はな椰菜なやさいがならんで

みた。これから本国へたづねてやるのも返事の来るまで容易でない、それにまだ二百里だ、と私は考へて又たよらないやうな気がした。

白崎特務曹長は先に立ってぐんぐん歩いた。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十四巻」筑摩書房

1980（昭和55）年5月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年1月20日初版第4刷発行

入力：林 幸雄

校正：mayu

2003年1月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

花椰菜

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>